

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目 張愛玲研究：その視覚的表現における美学

氏 名 楊 韻

## 論 文 内 容 の 要 旨

本稿は、張愛玲の絵画、詩歌、服飾に着目することで、異なるジャンルの視覚的表現に見られる張愛玲の審美眼ないし彼女の芸術、文学、社会に対する姿勢、つまり〈傍観者〉、〈見られる者・抵抗者〉という姿勢の成立を究明することによって、張愛玲に対する美学的解釈、とりわけ従来の研究だけでは見えてこなかった‘張愛玲’、即ち張愛玲が自分をどう見せようとしたかということについて考察を行なったものである。

本稿は「序論」、「本論」（三章）、「結論」の五章から構成されている。

第一章「張愛玲の絵画研究」の第1節「張愛玲における芸術観」では、張愛玲の西洋画、中国画、日本画に対する認識を考察することで、彼女の和洋中折衷の芸術観を考察した。こうした張愛玲の芸術観の背景には、中華民国初期から中華人民共和国が成立するまでの時期にかけて、日本美術、西洋美術の流布、受容、発展が中国近現代美術に新しい局面をもたらしたこととも関わって、全国規模の美術展覧会が3回開催されたという事情がある。日本、西洋、中国絵画技法を広汎かつ積極的に摂取してきた張愛玲はこれを機にリアリズムを基盤として、和洋中折衷という、独自の芸術性を開花させた。第2節「絵に見られる張愛玲の姿勢」では、絵に見られる張愛玲の〈傍観者〉、〈見られる者・抵抗者〉としての姿勢を考察した。張愛玲の手がけた表紙絵、コラージュ、デッサンに見られる彼女の〈傍観者〉の姿勢は、〈傍観者〉である張愛玲が〈傍観される対象〉、即ち絵に描かれた人物像と特定の距離を置いて観察し、後者に対する強制権力行使するものである。こうした傍観者の姿勢にはパノプティコンの権力装置に類するメカニズムが存在する可能性が示唆され、更に張愛玲の現実社会との乖離が見られる。張愛玲が題材とした風刺画ないし彼女の手がけたセルフポートレート、写真ポートレート、挿絵において、〈見られる者・抵抗者〉という姿勢が見られる。こうした姿勢の形成は、淪陷区の上海文壇で一席を勝ち得た女流作家たちの「スター化」フィーバーによって大衆の彼女らに対する性役割の期待が膨らみ、その結果、女流作家を〈見る〉欲望が発生したことに起因している。こうしたなか、張愛玲は自らを大衆に見せること、即ち〈見られる者・‘張愛玲’〉を完成させることで大衆の見る欲望に抵抗し、女流作家としての主体性を取り戻そうとしたことを考察した。

第二章「張愛玲の詩歌研究」の第1節「張愛玲における詩観」では、張愛玲の西洋詩、中国現代詩、和歌に対する認識を考察することで、張愛玲の詩観を考察した。張愛玲が詩観の価値意識まで踏み込んだのは、胡蘭成に出逢い、エッセイ「詩与胡説」の仕上げにかかった頃である。その頃、文芸誌を発足させようとしていた胡は張愛玲からの提言を受け、詩歌に関するコミュニケーションが頻繁に行われた。また張愛玲は、詩に感銘を受けて自らの過去の内省、内観を考えるようになり、更に詩に対する批判的摂取を自らの詩的感性を培う養分にした。第2節「詩に見られる張愛玲の姿勢」では、詩に見られる張愛玲の〈傍観者〉、〈見られる者・抵抗者〉としての姿勢を考察した。張愛玲の書いた詩に見られる彼女の〈傍観者〉の姿勢は、〈傍観者として姿勢を維持する〉／〈傍観者として姿勢を放棄する〉／〈傍観者の姿勢を放棄してから再び維持する〉という三つのパターンに分けられる。これは〈傍観者〉としての張愛玲が〈傍観される対象〉（詩の詠じる対象）の違いによって主体的に調整したのだと言えよう。また、張愛玲の〈見られる者・抵抗者〉という姿勢は彼女の書いた諧謔詩によって提示された。〈見られる者〉としての張愛玲は諧謔詩を武器にして〈見る側〉としての教員に抵抗しようと企図したものの、かえって〈見られる者〉の主体性の無さを証明することになった。しかしながら、人生の晩年が近づくと、張愛玲はその主体性の無さを受け入れることで時間への超克、即ち〈見る主体〉としての時間の、〈見られる対象〉として生き抜くという超然とした張愛玲の抵抗者としての姿勢を見せたことを論じた。

第三章「張愛玲の服飾研究」の第1節「張愛玲における服飾観」では、張愛玲の許地山思想に基づいた服飾観を考察した。許地山の主張の追加補正を目的としたものであるにもかかわらず、清末民国期の服装統制下の女性への配慮を軸にして、張愛玲は螺旋形の思考を以て服飾観を構築していったのである。彼女のこうした服飾観には許地山思想という枠組みの中では見えてこなかった開放性、創造性、独自性がある故、許地山思想の更なる昇華である。第2節「服飾に見られる張愛玲の姿勢」では、服飾に見られる張愛玲の〈傍観者〉、〈見られる者・抵抗者〉としての姿勢を考察した。張愛玲による服飾描写に見られる彼女の〈傍観者〉の姿勢は、物語の語り手と同一化することによって成り立っている。この場合、張愛玲は〈自らと語り手が混在する〉というトリックを仕掛けることで、傍観者の姿勢で作中人物を眺望しているのである。また、張愛玲のファッションスタイルからは彼女の〈見られる者・抵抗者〉としての姿勢が窺える。この場合、張愛玲はチェーホフの短編小説『箱に入った男』を参考にして、「箱」として機能している衣服を「セルフプロデュースのショー」を〈見せる〉ためのカモフラージュとして捉えている。更に、社会の着装規範による視覚的支配に抵抗するため、〈見られる者〉としてしか自己を見ることができないという立場に置かれた張愛玲は新しき「光景」として機能している「奇装異服」の視覚表象を作ること、女性、即ち男性に映る「光景」として存在するというジェンダーステレオタイプへに反発した。こうした反発には更に張愛玲の政治的疎外意識が窺える。彼女は「箱」として機能している衣服に入ること、自分を現実社会から切り離して政治イデオロギーの影響を受けないようにして、権力から個人の自由を守ろうとした。

ここまで、絵画、詩歌、服飾といった視覚的表現に見られる張愛玲の審美眼及び彼女の〈傍観者〉、〈見られる者・抵抗者〉としての姿勢を究明した。小説家、エッセイスト、脚本家、翻訳者として活躍してきた張愛玲は、上記以外のジャンルにおいても一貫した美的意識、姿勢を見せたが、上記ジャンルだけでは見ることのできない一面を持っていた。こうした点でも、張愛玲の美学的考察にあたって、彼女の絵画、詩歌、服飾を考察してきた意味がある。

本稿は、張愛玲の視覚的表現における美学を考察することによって張愛玲に対する美学的解釈を行なった。その結果として、〈傍観者〉、〈見られる者・抵抗者〉としての‘張愛玲’を成り立たせたのである。これは‘張愛玲’の重層性、多義性が表面化していくことと深くつながっているのみならず、‘張愛玲’を複眼的、立体的に見る必要性も示唆している。